夜釣

泉鏡花

青空文庫

これは、大工、大勝のおかみさんから聞いた話である。

牛込築土前の、此の大勝棟梁のうちへ出入りをする、一寸使へる、岩次と云つて、女房持、小兒の二人あるのが居た。飲む、買ふ、搏つ、道樂は少もないが、たゞ性來の釣好きであつた。

また、それだけに釣がうまい。素人にはむづかしいといふ、鰻釣の絲捌きは中でも得意で、一晩出掛けると濕地で蚯蚓を穿るほど一かゞりにあげて來る。

「棟梁、二百目が三ぼんだ。」

大勝の臺所口へのらりと投込むなぞは珍しくなかつた。

が、女房は、まだ若いのに、後生願ひで、おそろしく岩さんの殺生を氣にして居た。

霜月の末頃である。一晩、陽氣違ひの生暖い風が吹いて、むつと雲が蒸して、火鉢の傍だと半纏は脱ぎたいまでに、惡汗が浸むやうな、其暮方だつた。岩さんが仕事場から——行願寺内にあつた、——路地うらの長屋へ歸つて來ると、何かものにそゝられたやうに、頻に氣の急く樣子で、いつもの錢湯にも行かず、さく〳〵と茶漬で濟まして、一寸友だちの許へ、と云つて家を出た。

留守には風が吹募る。戸障子がが〳〵鳴る。引窓がばた〳〵と暗い口を開く。空模樣は、

その癖、星が晃々して、澄切つて居ながら、風は尋常ならず亂れて、時々むく〳〵と古綿を積んだ灰色の雲が湧上る。とぽつりと降る。降るかと思ふと、颯と又暴びた風で吹拂ふ。次第に夜が更けるに從つて、何時か眞暗に凄くなつた。

女房は、幾度も戸口へ立つた。路地を、行願寺の門の外までも出て、通の前後を※した。人通りも、もうなくなる。……釣には行つても、めつたにあけた事のない男だから、餘計に氣に懸けて歸りを待つのに。——小兒たちが、また惡く暖いので寢苦しいか、變に二人とも寢そびれて、踏脫ぐ、泣き出す、着せかける、賺す。で、女房は一夜まんじりともせず、烏の聲を聞いたさうである。

然まで案ずる事はあるまい。交際のありがちな稼業の事、途中で友だちに誘はれて、新宿あたりへぐれたのだ、と然う思へば濟むのであるから。

言ふまでもなく、宵のうちは、いつもの釣だと察して居た。内から棹なんぞ……鉤も絲も忍ばしては出なかつたが——それは女房が頻に殺生を留める處から、つい面倒さに、近所の車屋、床屋などに預けて置いて、そこから内證で支度して、道具を持つて出掛ける事も、女房は薄々知つて居たのである。

處が、一夜あけて、晝に成つても歸らない。不斷そんなしだらでない岩さんだけに、女房は人一倍心配し出した。

さあ、氣に成ると心配は胸へ瀧の落ちるやうで、——帶引緊めて夫の……といふ急き心で、

昨夜待ち明した寝みだれ髪を、黄楊の鬢櫛で掻き上げながら、その大勝のうちはもとより、慌だしく、方々心當りを探し※つた。が、何處にも居ないし、誰も知らぬ。

やがて日の暮るまで尋ねあぐんで、――夜あかしの茶飯あんかけの出る時刻――神樂坂下、あの牛込見附で、顔馴染だつた茶飯屋に聞くと、其處で……覺束ないながら一寸心當りが付いたのである。

「岩さんは、……然うですね、――昨夜十二時頃でもございましたらうか、一人で來なすつて――とう〳〵降り出しやがつた。こいつは大降りに成らなけりやいゝがツて、空を見ながら、おかはりをなすつたけ。ポツリ〳〵降つたばかり。すぐ降りやんだものですから、可い鹽梅だ、と然う云つてね、また、お前さん、すた〳〵駈出して行きなすつたよ。……へい、えゝ、お一人。――他にや其の時お友達は誰も居ずさ。――變に陰氣で不氣味な晩でございました。ちやうど來なすつた時、目白の九つを聞きましたが、いつもの八つころほど寂寞して、びゆう〳〵風ばかりさ、おかみさん。」

せめても、此だけを心遣りに、女房は、小兒たちに、まだ晩の御飯にもしなかつたので、坂を駈け上るやうにして、急いで行願寺内へ歸ると、路地口に、四つになる女の兒と、五つの男の兒と、廂合の星の影に立つて居た。

顏を見るなり、女房が、

「父さんは歸つたかい。」

と笑顔して、いそ〳〵して、優しく云つた。——何が什うしても、「歸つた。」と言はせるやうにして聞いたのである。

不可ない。……

「うゝん、歸りやしない。」

「歸らないわ。」

と女の兒が拗ねでもしたやうに言つた。

男の兒が袖を引いて、

「父さんは歸らないけれどね、いつものね、鰻が居るんだよ。」

「えゝ、え、」

「大きな長い、お鰻よ。」

「こんなだぜ、おつかあ。」

「あれ、およし、魚尺は取るもんぢやない——何處にさ……そして?」

と云ふ、胸の瀧は切れ、唾が乾いた。

「臺所の手桶に居る。」

「誰が持つて來たの、——魚屋さん?……え、坊や。」

「うゝん、誰だか知らない。手桶の中に充滿になつて、のたくつてるから、それだから、遁げると不可いから蓋をしたんだ。」

「あの、二人で石をのつけたの、……お石塔のやうな。」
「何だねえ、まあ、お前たちは……」
と叱る女房の聲は震へた。
「行つてお見よ。」
「お見なちやいよ。」
「あゝ、見るから、見るからね、さあ一所においで。」
「私たちは、父さんを待つてるよ。」
「出て見まちよう、」
と手を引合つて、もつれるやうにばら〳〵と寺の門へ駈けながら、卵塔場を、灯の夜の影に揃つて、かはいゝ顔で振返つて、
「おつかあ、鰻を見ても觸つちや不可いよ。」
「觸るとなくなりますよ。」
と云ひすてに走つて出た。
女房は暗がりの路地に足を引れ、穴へ掴込まれるやうに、頸から、肩から、ちり毛もと、ぞツと氷るばかり寒くなつた。
あかりのついた、お附合の隣の窓から、岩さんの安否を聞かうとしでもしたのであらう。格子をあけた婦があつたが、何にも女房には聞えない。……

肩を固く、足がふるへて、その左側の家の水口へ。……

……行くと、腰障子の、すぐ中で、ばちやゝゝ、ばちやり、ばちやゝゝと音がする。……

手もしびれたか、きゆつと軋む……水口を開けると、茶の間も、框も、だゞつ廣く大きな穴を四角に並べて陰氣である。引窓に射す、何の影か、薄あかりに一目見ると、唇がひツつツた。……何うして小兒の手で、と疑ふばかり、大きな澤庵石が手桶の上に、づしんと乘つて、あだ黒く、一つくびれて、ばうと浮いて、可厭なものの形に見えた。

くわツと逆上せて、小腕に引ずり退けると、水を刎ねて、ばちやゝゝと鳴つた。

もの音もきこえない。

蓋を向うへはづすと、水も溢れるまで、手桶の中に輪をぬめらせた、鰻が一條、唯一條であつた、のろゝゝと畝つて、尖つた頭を恁うあげて、女房の蒼白い顔を、凝と視た。——と言ふのである。

青空文庫情報

底本：「鏡花全集　巻十四」岩波書店
　　1942（昭和17）年3月10日第1刷発行
　　1987（昭和62）年10月2日第3刷発行
初出：「新小説」春陽堂
　　1911（明治44）年
※初出時の表題は、「鰻」です。
入力：門田裕志
校正：土屋隆
2006年11月15日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夜釣

泉鏡花

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　https://aohelp.club/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/